Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-09-06

節の右方周縁部における線形順序と階層構造

森山，倭成

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2022-03-25
(Date of Publication)
2023-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第8216号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008216

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目

節の右方周縁部における線形順序と階層構造

氏　　名　：　森山倭成

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名	（主）岸本　秀樹	教授
	（副）田中　真一	教授
	（副）石山　裕慈	准教授

本論文では、日本語における分離 CP 構造について考察する。日本語の CP 領域には、終助詞やモダリティ要素、丁寧語などの多種多様な語が表出する。本論文では、日本語の CP 領域に現れる要素を記述・整理し、日本語の CP 領域は、(1)に示される五階建ての階層構造を有すると結論付ける。

(1) [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP ……]]]]]

日本語における終助詞や丁寧語などの文末形式は、CP 領域の統語論研究に対して示唆的な言語事実を提供する。CP は、主要部の C が投射してできた単一の句であると広く仮定されている（Chomsky (1986)）。しかしながら、Culicover (1991) や Rizzi (1997) では、CP は多重の投射から構成されているとする分離 CP 仮説（split CP hypothesis）が提唱されている。日本語の文末形式に目を向けると、単一 CP 仮説では正しく捉えられない言語事実が即座に見つかる。例えば、(2)では、時制要素の「た」の右側に複数の文末形式（「です」・「よ」・「ね」）が表出している。CP 領域は時制要素からなる TP より上位の構造位置に存在するので、(2)では、複数の主要部要素が CP 領域に起こっているということになる。(2)の例は、CP が単一の句ではなく、複数の投射から形成されていることを端的に表している。

(2) 楽しかった-です-よ-ね。

日本語の CP 領域には、終助詞やモダリティ要素、丁寧語などの様々な語が現れる。語彙のバリエーションが多い分様々なデータを作例できるという利点がある反面、それぞれの語が特有の統語的特性を有しているので、バラエティ豊富であることには CP 領域の研究を一層困難にするという側面もある。このような側面が影響してか、日本語の CP 領域に関わる研究は多数発表されているものの、日本語における分離 CP 構造に関しては未知の部分が数多く残されている。

本論では、CP 領域の階層構造を明らかにするために、(3)に示す二つの問いを設定して議論を進める。

(3) a. CP 領域の要素にはどのようなものがあるか。

b. 日本語における分離 CP 構造はどのようになっているか。

まず、(3a)の問題に取り組むために、先行研究で CP 領域の主要部要素であると考えられている文末要素が本当に CP 領域の要素であるかどうかを検証する。先行研究では、「です・ます」のような丁寧語、「だろう」のようなモダリティ要素、「よ・ね」のような終助詞、さらには「だ」のようなコピュラが CP 領域との関係を持つと論じられている。しかしながら、中には証拠が提示されないまま、CP 領域の要素であるという前提で議論が展開されるケースもある。本論では、各章において様々な文末要素の統語特性を観察し、CP 領域の主要部にあたるものとそうでないものを峻別する。上記の文末要素だけでなく、終助詞の「じゃん」や「もん」などのように、先行研究で扱われてこなかった文末要素についても、CP 領域の要素であるかどうかを検証する。

次に、(3b)の問題については、日本語の言語事実に基づいて日本語の分離 CP 構造を追究する。文末要素の順序関係に注目し、[SRP [EP [ForceP [MP [AddrP ……]]]]] からなる五階建ての階層構造を提案する。SRP (Soliciting Response Phrase) は聞き手への応答要求に関わる語が現れる投射である。主要部には「な・ね」が起こる。EP (Emphasis Phrase) は命題内容を強調する働きを持つ「よ」が起こる投射である。ForceP は文のタイプの指定（平叙文・疑問文・命令文など）に関わる投射で、主要部には疑問を表す「か」が起こる。MP (Modal Phrase) は話し手の認識や判断に関わるモダリティ要素が起こる投射で、主要部には終助詞の「っけ」やモダリティ要素の「だろう」が生じる。AddrP は、聞き手の属性や聞き手との関係（親疎や上下関係など）の指定に関与する投射であり、時制要素の右隣に生起する丁寧語の「です」が主要部に現れる。

日本語の CP 研究では、Rizzi (1997) や Cinque (1999) などに代表されるカートグラフィー研究の枠組みが前提にされることがしばしばある。ところが、Rizzi (1997) らが提案する構造は、他言語のデータに動機付けられたものであるから、その構造が日本語にも当てはまるという保証はない。本論では、他言語のデータではなく、日本語の言語データに即して新たな階層構造を追究する。本論の提案は、日本語の言語事実に動機付けられた階層構造を提案する研究としての意義を持つ。また、これまでの日本語の CP 研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞などの文末要素が個別的に研究されてきた。これに対して、本論で提案する五階建ての階層構造を仮定することで、それらの文末要素を統一的に捉えることが可能になる。

本論は五章構成である。第一章では、分離 CP 仮説が提案されるまでに至る経緯をまとめ、日本語の CP 研究の現状を整理する。第二章では、日本語における分離 CP 構造として、五階建てからなる階層構造を提案する。第三章では、モダリティ要素の認可に関わる MP と関係付けられる文末要素を整理する。第四章では、第二章で提案する五階建ての階層構造を前提に、日本語における分裂文の統語構造を提案する。第五章は結語である。以下では各章の概要を示す。

第一章では、分離 CP 仮説に至るまでの経緯および日本語の CP 研究の状況を概観する。補文標識は Rosenbaum (1967) によって提案され、当初は変形規則によって派生に導入されていた。その後、Bresnan (1970) が句構造規則に基づく分析を提案する。X'理論の時代に入ってからは、CP という投射が仮定されることが一般的になる。さらに、1990 年代以降、CP を単一の投射とみなさず、多重の投射からなるとする分離 CP 仮説が提案される。第一章では、日本語の CP 研究についてもまとめる。日本語の CP 研究では、CP 領域には、丁寧語・モダリティ要素・終助詞が現れると論じられてきた。日本語の CP 研究には少なくとも二つの問題がある。第一に、日本語の CP 研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞・コピュラなどの文末要素が個別的に研究されている。しかしながら、日本語の分離 CP 構造を明らかにするためには、丁寧語・モダリティ要素・終助詞のような文末要素を統一的に扱う理論を追究することが求められる。第二に、先行研究では Rizzi (1997) の [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP ……]]]]] の階層構造を前提として議論が展開されることがある。ところが、日本語の分離 CP 構造がイタリア語のそれと同一であるという保証はないので、日本語の言語事実に基づいて分離 CP 構造を追究することが重要となる。このような背景を踏まえ、第一章においては、「CP 領域の要素にはどのようなものがあるか」と「日本語における分離 CP 構造はどのようになっているか」という二つの問いを設定する。

第二章では、日本語の CP 領域の階層構造を明らかにするために、丁寧語・モダリティ要素・終助詞に関わるデータを取り上げ、[SRP [EP [ForceP [MP [AddrP ……]]]]] の階層構造を提案する。まず、形容詞型の活用語が現れる文に表出する丁寧語を AddrP の主要部であると仮定し、終助詞の「っけ・わ」との共起関係に基づいて、AddrP は CP 領域の最下位に投射する句であることを示す。次に、Koizumi (1993) に従い、MP を仮定した後に、終助詞の「っけ」と疑問を表す助詞の「か」の線形順序から [ForceP [MP [AddrP ……]]] の階層関係が成立していることを見る。続いて、Saito and Haraguchi (2012) や Saito

(2015) の観察に基づき、ForceP の上位には、命題内容の強調に関わる EP と応答要求に関わる SRP が投射することを論じる。それらの言語事実を組み合わせると、[SRP [EP [ForceP [MP [AddrP ……]]]]] の階層構造が得られる。この階層構造を仮定することで、先行研究ではほとんど分析が与えられていない終助詞の「もん（もの)」や感嘆を表す「こと」の文法特性を捉えることが可能になる。さらに、第 2 章で示されるデータには、Rizzi (1997) の階層構造では説明できないものが多く含まれる。このため、第 2 章で提供される言語事実はカートグラフィー研究に対して新たな問題を提起する。

第三章では、MP の投射に生起する主要部要素を整理する。推量辞（「う」・「だろう」）や意志・勧誘を表す接辞（「(よ) う」)、非命題確認要求表現（「じゃん」・「やん (関西方言)」）・否定推量の「まい」・補文標識の「ように・こと」が MP の主要部であることを示す。さらに、それぞれの主要部の補部選択に違いがあることを示す。例えば、「じゃん」と「やん」は非常に近い意味を持つが、「やん」は TP または AddrP を補部に取り、「じゃん」は TP のみを補部に取るという選択制限に関する対比が見られる。第 3 章では、丁寧語との共起関係からこのことを示す。さらに、MP の主要部の中には、M に生起した後に主要部移動によって SR に移動するものがあることを指摘する。確認要求を表す「だろう」は SR への主要部移動の適用を受ける。加えて、(非) 命題確認要求を表す「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか（長崎方言)」のような表現は、CP 領域ではなく TP の下位に生成されることを論じる。

第四章では、日本語の分裂文の統語構造について、コピュラの構造位置・焦点要素の構造位置・前提節の統語構造の観点から考察を加える。まず、コピュラの「だ」・「である」の構造位置については、時制要素の接続と伝聞を表す「そうだ」の補部への埋め込みから、TP の下位にとどまることを示す。さらに、「まい」の接続の可否に関する事実から、「である」は Cop-V-v に対応する主要部であるのに対し、「だ」は CopP の主要部であると論じる。次に、焦点要素の構造位置に関しては、未確定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語の順序関係に関わるデータに基づいて、焦点要素は CopP の補部にとどまると主張する。最後に、前提節の統語構造については、丁寧語が前提節に現れることから、前提節を導入する「の」は MP の主要部であり、AddrP または TP を補部に選択すると論じる。日本語の分裂文研究では、空演算子分析と直接移動分析という二つの分析が提案されている。コピュラの構造位置・焦点要素の構造位置・前提節の統語構造に関わるデータは、いずれも直接移動分析の問題点を提供する。

第五章は結語である。第一章で設定した二つの問いに対する本論の提案をまとめる。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	森山 倭成
論 文 題 目	節の右方周縁部における線形順序と階層構造

要　　旨

本論文では、日本語における分離 CP 構造について考察する。「CP 領域の要素にはどのようなものがあるか」と「日本語における分離 CP 構造はどのようになっているか」という二つの問いを設定し、議論を展開する。本論文では、日本語の CP 領域に現れる要素を記述・整理し、日本語の CP 領域は、$[_{SRP}$ $[_{EP}$ $[_{ForceP}$ $[_{MP}$ $[_{AddrP}$ ……]]]]] の五階建ての階層構造を有すると論じる。

第一章では、分離 CP 仮説に至るまでの経緯および日本語の CP 研究の状況を概観する。補文標識は Rosenbaum (1967) によって提案され、当初は変形規則によって派生に導入されていた。その後、Bresnan (1970) が句構造規則に基づく分析を提案する。X'理論の時代に突入してからは、CP という単一の投射が TP の上位に仮定されることが一般的になる（Chomsky (1986)）。さらに、1990 年代以降、CP を単一の投射とみなさず、多重の投射からなるとする分離 CP 仮説が提案される（Culicover (1991); Rizzi (1997)）。日本語の CP 研究では、「です」や「ます」のような丁寧語・「だろう」や「まい」などのモダリティ要素・「よ」や「ね」などの終助詞が CP 領域に現れると論じられてきた。日本語の CP 研究には少なくとも二つの問題がある。第一に、日本語の CP 研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞・コピュラなどの文末要素が個別的に研究されているが、日本語の分離 CP 構造を明らかにするためには、丁寧語・モダリティ要素・終助詞のような文末要素を統一的に扱う理論が求められる。第二に、先行研究では Rizzi (1997) の $[_{ForceP}$ $[_{TopP*}$ $[_{FocP}$ $[_{TopP*}$ $[_{FinP}$ ……]]]]] の階層構造を前提として議論が展開されることがあるが、日本語の分離 CP 構造がイタリア語のそれと同一であるという保証はないので、日本語の言語事実に基づいて分離 CP 構造を追究することが重要となる。このような背景を踏まえ、第一章においては、「CP 領域の要素にはどのようなものがあるか」と「日本語における分離 CP 構造はどのようになっているか」という二つの問いを設定する。

第二章では、日本語の CP 領域の階層構造を明らかにするために、丁寧語・モダリティ要素・終助詞に関わるデータを取り上げ、$[_{SRP}$ $[_{EP}$ $[_{ForceP}$ $[_{MP}$ $[_{AddrP}$ ……]]]]] の階層構造を提案する。まず、形容詞型の活用語が現れる文に表出する丁寧語を AddrP（Addressee Phrase）の主要部であると仮定し、終助詞の「っけ・わ」との共起関係に基づいて、AddrP は CP 領域の最下位に投射する句であることを示す。AddrP は、聞き手の属性や聞き手との関係（親疎や上下関係など）の指定に関与する投射である。次に、Koizumi (1993) に従い MP を仮定した後に、終助詞の「っけ」と疑問を表す助詞の「か」の線形順序から $[_{ForceP}$ $[_{MP}$ $[_{AddrP}$ ……]]] の階層関係が成立していることを見る。ForceP は文のタイプの指定（平叙文・疑問文・命令文など）に関わる投射であり、主要部には疑問を表す「か」が現れる。続いて、Saito and Haraguchi (2012) や Saito (2015) の観察に基づき、ForceP の上位には、節全体の意味の強調に関わる EP と応答要求に関わる SRP (Soliciting Response Phrase) が投射することを論じる。E には終助詞の「よ」、SR には終助詞の「な・ね」が起こる。それらの言語事実から、$[_{SRP}$ $[_{EP}$ $[_{ForceP}$ $[_{MP}$ $[_{AddrP}$ ……]]]]] の階層構造の階層構造を仮定する。このことから、先行研究ではほとんど分析されていない終助詞の「もん（もの）」や感嘆を表す「こと」の文法特性について、AddrP から SRP までの主要部要素との共起関係を手がかりにして、「もん（もの）」は M から E に主要部移動する要素であり、感嘆を表す「こと」は M から SR に主要部移動する要素であることを論じる。

主査記載氏名	岸本　秀樹

第三章では、推量辞（「う」・「だろう」）や意志・勧誘を表す接辞（「（よ）う」）、非命題確認要求表現（「じゃん」・「やん（関西方言）」）・否定推量の「まい」・補文標識の「ように・こと」が MP の主要部であることを示す。さらに、それぞれの主要部の補部選択に違いがあることを示す。丁寧語との共起制限から、「だろう」・「じゃん」は TP を補部に取る一方で、「やん（関西方言）」・「ように」・「こと」は TP または AddrP を補部に取れることを論じる。さらに、MP の主要部に現れる確認要求を表す「だろう」は M から SR への主要部移動の適用を受けることを示す。加えて、丁寧語との共起関係や終助詞の「の」との共起関係などに基づいて、（非）命題確認要求を表す「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか（長崎方言）」のような表現は、CP 領域ではなく TP の下位に生成され、複文構造を有することを示す。（非）命題確認要求を表す表現の「じゃん」・「やん（関西方言）」が CP 領域（MP）の要素であるのに対して、「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか（長崎方言）」は CP 領域とは関係を持たないことを示し、要素の構造位置を意味的な類似性のみでは特定できないことを示唆する。

第四章では、日本語の分裂文の統語構造について、コピュラの構造位置・焦点要素の構造位置・前提節の統語構造の観点から考察を加える。日本語の分裂文研究では、空演算子分析（Hoji (1990); Kizu (2005)）と直接移動分析（Hiraiwa and Ishihara (2012)）という二つの分析が提案されているが、コピュラの構造位置・焦点要素の構造位置・前提節の統語構造に関わるデータは、いずれも直接移動分析の問題点を提供することを示す。まず、Hiraiwa and Ishihara (2012) などの先行研究では、コピュラの「だ」は FocP の主要部であると分析されているが、時制要素の接続と伝聞を表す「そうだ」の補部への埋め込みから、そのような仮説は排除されることを論じる。さらに、「まい」の接続の可否に関する事実から、「だ」は叙述の成立の関与する機能範疇である CopP の主要部であるのに対し、「である」は「で」と「ある」に分離され、「で」は Cop の主要部、「ある」は V-v に対応する主要部であると論じる。次に、焦点要素は FocP の指定部に移動すると Hiraiwa and Ishihara (2012) で提案されているが、不定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語の順序関係に関わるデータは、いずれも焦点要素が CopP の内部にあることを示唆する。最後に、前提節の統語構造については、前提節を導入する「の」は MP の主要部であり、AddrP または TP を補部に選択すると論じ、さらに、CopP を補部に取る小節構文への分裂文の埋め込みが可能であることから、分裂文の前提節は CopP の指定部位置に基底生成され、T が持つ EPP の素性を駆動力として、TP の指定部に A 移動すると論じる。

第五章は結語である。

本論文は、これまで体系的な研究がなかった日本語の右方の周縁部に対して、日本語の言語事実に動機付けられた階層構造を提案し、加えて、日本語の語末表現や分裂文に対する新たな事実を多く発掘している点において、理論言語学の研究に大きく寄与するものであると考えることができる。

以上の審査結果をもとに、本審査委員会は全員一致で論文提出者・森山 倭成が博士(学術)の学位を授与されるに足る資格を有すると判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏　名	区 分	職 名	氏　名
主 査	教 授	岸本　秀樹	副 査	教 授	田中　真一
副 査	准教授	澤田　治	副 査	准教授	石山　裕慈
副 査	南山大学 国際教養 学部 教授	斎藤　衛			